

国際機関邦人職員リレーエッセイ

第4回：レバノン特別法廷検察局勤務 亀井桂さん

私は、レバノン特別法廷(Special Tribunal for Lebanon、以下「STL」)内の検察局(Office of the Prosecutor)において、分析官(Analyst)として勤めています。STLは、ハーグにある国際法廷の中でも、比較的小規模な裁判所です。

[STLについて]

2005年、レバノンの首都ベイルート。車列を狙った爆発によって、ハリーリ元首相が暗殺されました。2500kgものTNT爆弾が使用され、ハリーリ氏の他21名が死亡、231名が負傷したテロ事件でした。現場道路には爆発の衝撃による巨大なクレーターができ、付近の建物は下階部分が破壊される等、凄まじいインパクトでした。ニュース映像は燃え盛る車から這い出そうとしそのまま炎に飲み込まれてしまった人などを映し出していました。この事件の発生から約一週間後に国連は調査団を派遣、数ヶ月後に事件解明のために国連独立捜査委員会(United Nations International Independent Investigation Commission 以下「UNIIC」)を設置、その調査結果を受けて、2009年にSTLが設立されました。2011年から2012年にかけて容疑者5名が起訴されましたが、うち1名が2016年に死亡したため、2017年現在、4名の裁判が係属中です。

STLの特徴としては、起訴されている被告人が一人も逮捕されておらず、被告不在のまま裁判が進められている点が挙げられます。被告は全員がイスラム教シーア派組織ヒズボラの関係者とみなされており、例えば2016年に死亡した被告の一人であったムスタファ・バドレディンは、軍事部門のトップとみなされていました。ヒズボラは強力な武装集団でありながら、有力政党でもあります。この複雑な構造を理解するには、レバノンと、イスラエル・パレスチナとの関係という中東の核ともなる問題が絡んできますが、ここでは省略します。

[私の業務内容について]

分析官(Analyst)の役割は、簡単に言えば証拠を分析し、検察官を補佐することです。STL検察局は、大きく検察部門と捜査部門に分けることができます。検察部門は検察官を中心に法的側面を扱う部門、捜査部門はその名の通り捜査を行う部門です。捜査部門には主に捜査官(Investigator)と分析官(Analyst)が勤務しており、前者は現地

での証人に対する聞き取りや書類を集めたりと実際の証拠収集をするのが主な仕事であり、後者は収集された膨大な数の証拠を精査し犯罪の構成要件に該当するような証拠を洗い出すのが主な仕事です。

分析官は、分析の結果、証拠が足りない部分がある場合はその点を捜査官に指摘し、更なる証拠収集について助言します。また、幾つかの証拠を照らし合わせて、矛盾点・整合点を探し出すのも分析官の役割です。例えば、「不審な電話を受けたのは何日だったか覚えていないが、祝祭日だったのでおそらく〇月〇日だと思う」という証言があったとします。それにも関わらず、その日が実際には平日にあたる場合は、通話記録に照らし合わせて実際の日を確定できるかどうかを検証します。分析官の仕事は、収集した情報量が多い場合には特に重要になります。国際裁判所が設置されるような大規模な事件の場合は通常は情報量も膨大になりますので、その中から重要かつ決定的な証拠を探し出すのは大変時間と手間のかかる作業になります。

捜査段階が終わり、起訴、裁判の段階に入ると、捜査官に代わって今度は検察官との連携が密になります。この段階では裁判所に提出する証拠書類や、裁判で使用するプレゼンテーション資料を作成することが主な仕事となります。捜査段階から密接に証拠に関わっている分析官は、検察官にとって事実関係を的確にアドバイスできる存在となります。また稀に分析官が証言台に立って証言をすることもあります。私も作成した証拠書類について証言する機会があり、自分の関わってきた仕事が実際に裁判に役立つことを感じる事ができる貴重な経験となりました。



[私の経歴]

私の経歴を簡単にお話しますと、日本の大学を卒業、日本の企業に3年弱勤務、オランダの大学院にて国際人権法を学びました。小・中学校と海外で過ごしたので語学には不便を感じないだろうと考えていましたが、大量の専門的な文献を短時間のうちに読まなくてはならないという状況に、留学当初は苦勞しました。しかしこの大学院での経験は、その後のキャリアや現在の分析官としての仕事に大変役立っています。大学院修了と同時に、国際刑事裁判所(ICC)においてインターンシップを経た後に7ヶ月間の短期契約で勤務、2006年よりUNIIICにてベイルート勤務、2009年よりSTLにてハーグで勤務しています。

[国際機関での勤務をお考えの方へ]

国際機関での勤務をお考えの学生の方には、インターンシップを是非お勧めします。その職場の雰囲気に触れることによって自分に合った職場なのかを探ることができますし、一般には知られていない職種が存在も知ることができると思います。現在、国際機関以外にお勤めで転職をお考えの方には、国際機関は個人的な経験からいうとスローな職場であることをお伝えしておきたいと思います。多種多様なバックグラウンドをもつ人々が集まり共に仕事をしていくということはダイナミックである反面、物事の決定に長い時間がかかるということでもあります。しかし上でお話したように、実際に自分の仕事が国際的に重要な場面で貢献できたのを実感できる瞬間は、他では得がたい魅力があると思います。また日本の職場で働いている友人・家族と比べると、ワーク・ライフバランスのとれた生活ができているのも、私の仕事の魅力の一つかと思えます。

* 本稿は個人的見解に基づくものであり、国連やSTLの見解を反映するものではありません。